言語治療

ことばの異常な子どもの指導

(二) ことばのおくれた子ども

田口恒夫

コトバの発達のおくれている子どもは、意外に多いものです。わたくしどもの施設には、たくさんの人がコトバの相談に来られますが、その人たちのおよそ三分の一は、子どものコトバの発達がおくれていることを心配して来られるかたがたです。

〈コトバのおくれの症状〉

そういうかたがたは、自分の子どものコトバと、よその同じ年頃の子どもの話し方とをくらべて、次のような点の中のいくつかについて心配しています。

(一) 言えるコトバの数が少ない。
(二) いつまでも、赤ちゃんことばのような話し方をしている。
(三) 口数が少なく、話そうとしない。
(四) 言いたいことを、コトバであらわすことが、へたである。
(五) コトバが、一度にひとつふたつぐらいしか出ず、コトバがつながらない。
(六) 正しく発音できない音(おん)が、いくつもある。
(七) 前後の音を混同したり、ある音をぬかしたりというような、発音のまちがいが多い。
(八) コトバがはっきりせず、わかりにくい。とくに、よその人には、何を言っているのかわからないらしい。
(九) コトバが短かく、文の組立ても幼稚である。
(十) テニヲハや、形容詞などを、うまく使いこなすことができない。

以上のような症状のいくつかが揃っている場合には、その子のコトバの発達が、相当おくれているのではないかという疑いが濃厚です。

〈コトバのおくれの判断〉

そういう場合には、ぜひとも、次のことを考えなおしてみる必要があります。

㈠ まず、たしかにコトバの発達がおくれているかどうか、ということ。

㈡ どの程度おくれているか、ということ。

話しコトバというものは、人に教えられて、習って、おぼえるものですが、コトバを話す能力の基本的なところは、七才前後にはほぼ完成してしまうものです。その七年間のうちでも、とくに二才から四才までの二年間は、子どもがいちばん激しい勢でコトバを習いおぼえる時期ですので、おくれていることが、はじめてはっきりしてくるのも、主として幼稚園年令の時代であるわけです。

おくれているかどうかを判断するためにはいろいろな尺度ではかってみて、〝標準〟とくらべ合わせてみるのですが、そのためには、まず、〝正常な〟言語発達というものを、じゅうぶんによく理解していなければなりません。折にふれて、教科書や参考書を見なおして、正常発達の様式をたしかめておくことがたいせつです。

おくれの判断の資料としては、実用的には次のような点に注意してみるのが好都合です。

㈠ **語い** これについては、標準的な検査法もあり、よい研究も発表されています。それらによれば、四才児は約千五百のコトバをもっています。

㈡ **発音** 四才の子どもは、サ行・ザ行・ラ行・シャ行・ツなどは、まだ不完全だったり、はっきりしなかったりしても、すぐに異常だと決めつけることはできませんが、タ行（ツを除く）・ダ行（ヅを除く）・カ行・ガ行などは、ほぼおとなと同じように発音できるはずです。

㈢ **明瞭度** 子どもの言っていることが、どの程度他人にわかるかという点では、四才児のコトバは、ほぼ九割以上わかるのがふつうです。二才の子どもで大体六割だとされています。

㈣ **話文の長さ** 四才の子どもは、平均して、四語を組合わせて、ひとつの文章にしてお話しをしているといわれます。コトバが、平均してひとつかふたつしかつながらないとしたら、その面では、だいたい二才レベルであるということができます。

㈤ **コトバの〝生育歴〟** その子についての、いままでのコトバの発達の様子を詳しく親に聞いてしらべてみると、たいへん参考になります。とくに、はじめてコトバを話すようになった時期（ふつう、十ないし十二か月）と、その後六か月または一年間における語いの増加（ふつう六か月間に約二〇、一年間に約二〇〇）の模様を調べるのが便利です。

㈥ このほか、おしゃべりの量や、話文がどの程度要領を得ているかどうかとか、テニヲハの使い方とか、ことば使いとかをみることは、それぞれ参考になります。

〈コトバのおくれの原因診断〉

〝原因〟は何だったか、ということになると、思ったほど簡単には問題は片づきません。原因は、たいていの場合ひとつだけではな

いからです。もともとの原因は、簡単なものであったかもしれませんが、それにまた、他のいろいろな条件が加わり、その上に長い年月を経て、それらがお互に反応し合って、そしてその結果が、今の、コトバのおくれという形で現われてきているわけです。したがって、幼稚園年令ともなると、もはや、何のためにこうなったのかという、もともとの問題は、すでに消えてしまって、探し当てられないことも、しばしばあります。したがって、診断という仕事には、できるだけ、専門家の意見をよく聞くことがたいせつです。

ただ、いつも、次の点については、よく観察や調査をおこなって確かめておく必要があります。

(一) 耳がふつうにきこえているかどうか。

子どものうしろから、呼き声で言っても、ことばの〝意味〟を理解するかどうか試してみるのは、いいことです。絵本でもみせながら絵の名を言ってそれを指ささせ、ふつうに、親をみながら声を出してやってみた場合とくらべて、まちがいが多くないかどうかをみるのが、よい方法です。

少しでも疑わしい時には、詳しい聴力検査をうけさせる手配をしてあげて下さい。

(二) 話しコトバを〝理解〟する能力はどうか、何才レベルの理解力があるか。

(三) 知能や社会性の発達はどうか。

(四) 話すのに必要な器官や、それを支配している神経系統の働らきが、ふつうでないという疑いはないか。

(五) 生まれてから今までに、ことばを教えられる機会はじゅうぶんにあったかどうか。

(六) 話すことの、必要と、喜びと、はげみを感じているかどうか。

(七) 気持がひどく沈んだり乱れたりしていないか。行動異常などの問題はないか。

(八) 家庭に、子どもの情緒やコトバの発達を妨げるような、悪い条件がありはしないか。

もし以上のような項目のいくつかに、明らかな〝問題点〟や〝異常〟がみつかっても、それが果して〝原因〟であるかどうかということや、現在のコトバのおくれを惹き起こすうえにどの程度の役割を演じているかということについては、いちがいに断定することは困難です。いつも、子どもの問題を全体としてよく考え合わせてみることが必要ですし、専門的な知識や経験も必要です。

〈指導の方針〉

まず、子どもを責めることなく、よく問題を〝理解〟してあげることです。そして、現在の、ありのままの子どもの状態を、そのまま、受け容れてあげることが、何より大切です。それから、原因らしいことや、関係因子のうちで、除けるものを除き、改善できるものを最大限に改善する方法を考えます。

一般的な順序としては、まず医学的な治療の必要なものには、そ

れを受けさせ、臨床心理学的な治療や指導の必要な場合には、その面での配慮をし、必要な部分については、専門の先生に依頼します。

友だち関係の調整や、社会性をつけてあげるための指導も、だいじです。

〈話し相手になってやる〉

コトバの指導の面で、最も大切なことは、できるだけ多く、子どもの話し相手になってあげることでしょう。子どもが少しでも声を出したら、どんなにコトバが幼稚でも不完全でも、それにはかまわず、すかさず振り向いて熱心に聴き入り、喜んで相づちを打ち、心から感心して、うけこたえをしてあげることです。

そして、そういう機会をできるだけたくさんもつように心掛けて下さい。

ただそれだけで、子どもは自信と安心感をいだき、話そうという気持になります。それこそ、理想的な、コトバの学習のチャンスを与えてあげることになるのです。この子どもたちに一番必要なのは、コトバの学習の機会を、少しでも多くもつことなのです。

また、そのような機会に、少しでも多く話して聞かせ、子どもの興味と関心に合った話しを、たくさん聞かせてやることも必要です。

〈コトバをなおそうとしない〉

言わせようとして「……と言ってごらん」「……と言いなさい」「もう一度言ってごらん」などということを、たびたびくりかえすのは、かえってたいへん望ましくないことです。

むやみに発音をなおそうとしたり、いちいち子どものコトバの端をとらえて矯正しようとしたりするのは、たいてい有害無益です。

コトバの発達レベルを無視して、五十音の発音練習をしたりするのは、何よりも、つまらないことです。

ともかく、コトバははぐくむものです。叩いたり、ねじまげたりして育つものではありません。

〈特殊な問題をもつ子ども〉

耳のきこえのわるい子ども、行動異常のはげしい子ども、ヒキツケのある子ども、発音の器官の働らきが鈍くて、ヨダレを出したり噛むことや吸うことや吹くことの下手な子ども、知能の著るしくおくれている子ども、などについては、それぞれ、その子どもの特性に合った特殊な指導や訓練が必要です。

これらの問題のいくつかについては、あとで、少し触れることにしますが、コトバを育てるための基本的な方針は、どんな場合にも共通しています。

子どもの年令や関心や、障害の実態に応じ、子どもの生活の中に、正しい指導を、うまく織り込み、とけ込ませていく工夫をすることが、成功の鍵です。